ふくしまから伝えたいこと、知らなければいけないこと。
第1回ふくしま学（楽）会の成果と課題

早稲田大学環境総合研究センター・早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

永井祐二*、李洸昊、松岡俊二*****

*早稲田大学環境総合研究センター、**地球・人間環境フォーラム、***早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

背景と目的：福島から持続可能な地域再生モデルを考える

福島県浜通り地域では、広野町などによる国際フォーラムを含む発表会や研究会などの交流の場が設定されてきたが、放射線リスクや廃炉などの専門的な話が中心のため、地域住民の理解促進にはつながりにくく、必ずしも本来の地域課題に関する交流の場としては機能してこなかったという地域社会の認識がある。このような観点から、既存の場とは異なる地域の多世代交流の「場」として、ふたば未来学園の高校生も含めた「第1回ふくしま学（楽）会」を開催した。本会は、被災地の調査研究や復興構想に関する提案づくりなどの多世代交流を実施してきた早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターの活動の一環として実施したものである。こうした多世代交流の「場」づくりの意義を明確にしながら、持続可能な復興への効果的な「場」づくりを目指すため、地域における「場」づくりのあり方について、研究者・住民の複数回の研究会および高校生との対話を通じて、地域の住民、団体、NPO、ふたば未来学園高等学校の生徒・教員らと議論を重ねた。今回の試行から今後の持続可能な福島再生をどのようにすればよいのかについて提案する。

地域の多様なアクターによる多世代交流の「場」づくり

福島県浜通り地域は、まだ県内外への避難者が多く、一方でこの地域を中心に国や県が進めるイノベーションコースト構想は、地域内に外部からの作業員などの転入者を多く招いている。このような特殊な状況において、国や県は復興促進のために各地方自治体に補助金などによる支援を展開しているが、地域再生にとって最も重要である住民参加型まちづくりが非常に弱い。また、地域団体や行政が何かのまちづくり事業を推進しようとしても、若い世代の参加が少ないという問題もある。このような状況を改善するために、今回は地元のふたば未来学園の高校生、NPO関係者、地域住民、行政、大学の研究者が集結し、世代や立場による「しがらみ」を越えた対話の中で、福島の未来を考える場を設定した。

地域の未来を創造する2つのテーマ設定

ふたば未来学園の高校2年生・3年生が行っている未来探求研究を中心に行政、地域団体、大学研究者が事前に議論を行い、福島の持続可能な再生を考えるため、以下の2テーマを設定した。各テーマごとの報告・パネルディスカッションの後、参加者を交えた対話を行った。

テーマ1　今、福島から世界へ伝えたいこと（ひと、もの、ことの交流）

テーマ2　今、福島について知りたいこと（原子力災害への対応など）

「場」づくりとミクロマクロループ

多様なアクター・世代からの報告

- 高校生が案内する視察ツアー：福島の安全性を伝えたい（高校生）
- 生きた教科書として現状を伝える（高校生）
- 地域でのイベントを通じた賑わい・生業づくりの促進（地域住民）
- 県外の方々との交流促進：視察ツアー、地域イベント（地域住民）
- 市民参加型森林手入れの可能性：世代を超える森林体験促進（大学）
- アーカイブ施設構想および地域参加の可能性（行政）

- トリチウム問題を議論したい（高校生）
- 廃炉における合意および意思決定の再考（地域住民）
- 風評被害の現状（地域住民）
- 5W1Hの視点からの問題分析（大学）
- 地方自治体と国・県・住民との関係（行政）

世代を超えた意見交換

「3・11を風化させないためには何が必要なのか。」
「事実を淡々と伝えていくことが重要である。」
「地域住民が学者に希望している事を伝えてほしい。」
「『誰に伝えるのか』を意識することが出発点ではないのか。」
「世界から受けた支援を忘れず、その恩返しをしたい。」

「『ふくしま学』を創設して、様々な人々を巻き込んでいきたい。」
「新しい情報を発見して世の中に出しても、厳しい反応がくる。」
「福島復興への住民参加が少ないため、住民が何を知りたいのか、何に困っているのかが見えづらくなっている。」
「将来、首長になって、原子力問題に取り組んでいきたい。」
「国や県に心理的に依存しすぎたのではないのかと反省している。」

成果

地域の様々な関係者が参加し、普段は交流のない世代（複数の世代や立場を越えた発表者）の意見を直接聞くことができ、従来の協議会などとは異なり、住民の思い、役場の本音、学者の言い分を生の声で聴くことができ、お互いの考え方の違いや共通点などの確認ができた。このことより、参加者の絆も深まった。参加者からは、「若い世代が地域の未来を考えていることに感銘を受けた」、「震災からまもなく7年になり、人々の記憶も薄れていく中で、記憶を消さないためには何が必要なのか考えた」、「地域住民が課題を自ら明確にして、その課題を解決するために誰にどのような協力を求めるのが重要かを考えた」、「このような場を繰り返し作って欲しい」、「学問分野の一つとして『ふくしま学』を創設し、研究するのはどうか」等の声が聞かれた。また、議論だけで終わるのではなく、新たな発想や協力関係の創出から地域再生のための次の具体的なアクションが明確になった。

課題

今回の試行による「場」づくりは、第1段階のため、それぞれの立場の意見表明を行うという側面が強くなった。そのため、それぞれの立場で意見が異なることは認識できたが、問題を誰がどのように解決するのかのような具体的な提案までには至らなかった。また、参加者数が75人であり、時間制約のため、各人の意見を全て聴くことができなかった。その点も踏まえ、第2回目では、第1回目で提示された課題を、5W1Hの視点から討論し、参加者一人一人の意見全てが吸収できるように進めたい。今回築いた「世代間の交流・様々な立場の人との交流」を、日常的な活動等での交流でも活かし、より強固なものにしていきたい。